

ヘイトスピーチに関する川崎市条例制定のためのパブリックコメントとして

日本キリスト教協議会
総幹事 金性済

2019年8月8日

わたしは、1970年代より、川崎市が在日コリアンの人権問題について、この日本のどのほかの都道府県市区町村よりも、先駆的に市民運動との話し合いに応じてこられましたことを高く評価しております。

1979年に日本は国際人権規約をついに批准することになり、その結果、全国の公営住宅から、入居に際しての国籍条項が撤去されましたが、川崎市はそれを待つまでもなく、先駆けて国籍条項を撤廃されたと記憶しています。

わたしは1980年代、岡山市内に居住し、指紋押捺問題・外国人登録法改正運動にかかわっておりました。その際、岡山市と話し合いを持つにあたり、いつも川崎市の先駆的事例を引用して、岡山市の外国人児童への就学案内開始を成功させたことを思い出します。

1996年には、川崎市は、全国に先駆けて、外国人市民代表者会議を設置され、川崎市内の外国人の生活と教育などについての意見が議会や行政に反映する道を作られました。

この度、ヘイトスピーチへの取り組みについて、2016年5月に成立したヘイトスピーチ解消法が罰則規定を設けられなかったという不十分な点は、いまだにネット上をはじめ、ヘイトが跋扈し拡散する社会現象の事実を直視すれば歴然としています。

戦後の日本の歴史教育の中で文部行政による縛りによってまともに教えられることがなかった、1923年9月の関東大震災朝鮮人虐殺は、当時の時代状況を背景としながらも、「朝鮮人が井戸に毒を投げ入れた... 暴徒となった」といった悪質な流言飛語によって拡大した無残な歴的事実であります。このような歴史を直視できる姿勢があれば、二度とその過ちと悲劇を繰り返さないために、しっかりとヘイトスピーチに対処しようという政策が生まれてくはずです。今日の日本政府、また立法府における、ヘイトスピーチ問題に対する中途半端な対応とは、過去の歴史的悲劇を、直視できず、むしろ隠ぺいしようとする姿勢と相関しているのです。あの悲劇は、かつて川崎市内にも及んで起こったことを、わたしは目撃証人から聞いたことがあります。

一体、何を守ろうとして過去の歴史の過ちを隠蔽しようとするのか。日本という国の名誉でしょうか。過去の過ちを隠蔽する非人道的で、良心に反する姿勢によって守られる国の名誉とはなんでしょうか。それは、この世界のどの国からも尊敬に値するものではなく、むしろ軽蔑に値するものと考えられます。日本という国が、そして国民が本当にアジアをはじめとする世界の国々から尊敬と信頼に値する国へと成熟するためには、過去の過ちに対する誠実な向き合いと謝罪の責任を担い、その記憶を貴重な社会的遺産として可視的に残して継承し、そのうえで、未来に対する再発防止の英知が政策となっていくものと考えます。

今日のこの国の政治の体質には絶望的にさえならざるを得ない気持ちを、わたしは禁じ得ないのです。

しかし、わたしは希望を失っていません。それは川崎市が、このヘイト問題について、様々な諸事情や考えが錯綜する中であっても、なんとかさらに踏み込んで、ヘイトを防止するための政策形成に努力しておられるからです。貴職におかれましては、ドイツをはじめとするヨーロッパ諸国の、ヘイトに対する法制について十分に検討してこられたことと存じます。そして、「表現の自由」論による慎重論は根強くあることもうかがえます。しかし、特定の個人や団体ではなく、集団に対して、それも社会的少数者に向けられる人種差別的表現がかつての日本で何を引き起こし、そして、今この日本でその規制を理念法のままで不十分に対処してきたこの3年の間にヘイト現象の現状はどうなっているかを精査くださり、あわせてアメリカ合衆国など、ヘイト関連で今もどんな痛ましい事件が生じているかを鑑みてくださり、なにとぞ川崎市がヘイトに対する罰則規定を設けた条例を制定してくださることを、心からお願い申し上げます。

この21世紀の混迷する時代に、古い単一民族神話に取りつかれて社会の和を保つという考えはもうこれからは通用しません。社会が持続可能な道を選択するためには、多文化多民族共生の社会文化を創り出すためにはそれにふさわしい法的インフラを早急に確立しなければなりません。

このように優れて現代的、未来的課題においても、川崎市がどこよりも先駆けて模範を示してくださることを期待してやみません。なにとぞ、この川崎市を、日本人も外国人も誰もが安心して信頼し合い、いろいろな文化多民族の英知がグローバルに分かち合わせ、クリエイティブな「歓待 hospitality」の街づくりを、川崎市が推進していかれることを願っております。よろしく申し上げます。

Hospitalityの語源は、ラテン語の hospes / hosti-pet-s から来ています。この言葉の意味は、「客、旅人」、また同時に「主人」という、「客一主人」の両義的意味を含んでいます。そし

て、この語源からまた、hostility（敵意）という概念も派生しています。フランスの哲学者ジャック・デリダは、このテーマを哲学的に考察しました。人間存在自身の中に、「主事」と「客」の両義的本質が内在する中で、人はある局面において「客・旅人・寄留者」と出会ったとき、そこに敵意という現実を引き起こすか、それとも歓待の時間と空間を創造するか、決断の前に置かれるのです。

「歓待の街・川崎 KAWASAKI: City of Hospitality」... このような名が世界に広がる夢を描き続けていきたいと考えます。